川下の風景㉑
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【東京物語】
小津安二郎といえば、やはりこの作品だろう。この映画、136 分と内容にしては尺が長い。
広島の老夫婦が東京に暮らす子どもたちを訪ね、家族関係の変化を身に染みて感じ、それでも自分たちは幸せだと噛みしめて、再び広島に帰るという、粗筋だけ読めばドラマ性に乏しい内容だが、これで十分 136 分の尺で見応えがあるから名作足る所以だ。

広島呉の街の風景
港を行き来する船、行き過ぎる汽車、煙を上げる工場の煙突
この映画、キャメラがパンしない
どんな遠景であっても、それをキャメラが上下左右に動くことがない

東京に旅立とうとする老夫婦の支度の様子。小津調といわれるローポジションで屋内風景を切り取る。人物の行き来に合わせて、アングルサイズは寸分も変わらず、カットだけが切り替わる。これによって空間認識が生まれ、観客はあたかもその座敷に座っているかのような感覚を覚える。
そして、台詞を語る人物のカット。バストサイズで均一に切り取り、それを役者ごとに切り換える。
バスト以上にアップにならない。台詞とカットの切り替えの独特のテンポ。これも小津調の特徴で、黒澤の作品とは対照的なリズムである。

これら、何の変哲もないような、単調と思えるような映画作りだが、これが観ていて飽きないのだから不思議だ。いや、単調といったが、やはりそこには家族のドラマがある。怒鳴るような怒りや、激しいぶつかり合い、派手な喜びや、押し付けるような感動も悲しさもない。淡々と家族の姿を見つめる老夫婦の姿が「あぁ、人の暮らしってこうだよなぁ」と共感せざるを得ない。

作品の公開は 1953 年。戦争が終わって 8 年余り。作品でも戦争で亡くなった息子の話が語られるが、戦時下を思えば豊かに、幸せに暮らせている自分たちの境遇に満足する人々の姿に現代を重ね合わせる。

【記憶の中の唄と手拍子】
今週末は昨年 99 歳で亡くなった祖母の法事が予定されている。
世間的にはよく言われるが、本当に時間の流れは早いもので一周忌となる。
週末の天気予報は「今季最大寒波」と毎回のように危機感を煽ってくれる。実際、日本海側の東北地方では大雪に見舞われ、多くの方が犠牲となり、また日常生活に困っておられる。かたや太平洋側では昨年に引き続いての少雨傾向であり、水不足が徐々に生活に影響を及ぼす。誰が考えても地球

環境の変動が影響していると思うが、経済第一主義者たちは自分たちの都合勝手で「真実」を解釈していく。
そんな折に選挙である。

祖母が亡くなった日も雪だった。
近年、昔ほど雪が降らない。積もることなど、本当に稀になった。今の子どもたちは雪遊びすらろくに知らない。そんな3月に祖母は亡くなったのだ。珍しく降り積もった雪の街を歩きながら葬儀場に向かったことを覚えている。
祖母は新潟の田舎に生まれ育った。99歳で亡くなったということは、今では珍しい大正生まれだった。戦前から戦中、そして戦後の苦しい時代を知っている。戦争の話を聞くことは少なかったが、お金や物の大切さは教えてもらってきた。

戦後80年。
物も情報も大量に消費され、大切に扱われるということがなくなった。
特に情報の扱われ方が雑になっている。それは情報を作為的、恣意的に垂れ流す方も、その情報の選択や視方に関する扱い方も。

子どもが小さい頃、まだ二人とも小学生だったか。祖母の車椅子を押しながら、夕暮れの小道を散歩した。会話らしい会話はなかったが、子どもたちと祖母と、「赤とんぼ」を謡いながら歩いた。ただただ、その記憶が穏やかに印象に残っている。あの時の子どもの声も、あの時の祖母の手拍子も。

【豊ならざるもの】
まるで、ある日、空からミサイルが降ってきました、とでも言わんばかりに、アメリカとイスラエルがイランを攻撃し、その国の要人を殺すところから戦争が始まった。
人を殺すことが殺人罪に問われることは、世界各国共通した秩序のはずだが、私たちはイランやガザで起こっている事実を「あぁ、また人が死んだ」ぐらいに捉えている。むしろ、それよりも深刻に頭を悩ませているのが、エネルギーの問題であり、イラン革命軍によりホルムズ海峡が封鎖されたとわかるや、私たちはたちまち不安に駆られている。目先のガソリン価格の上昇が注目の的となり、今、中東で起こっている戦火について、私たちはそうやってでしか現実味を帯びて捉えることができていない。

行き過ぎた資本主義社会の顛末を視ている
エネルギー、食糧、半導体…何もかもが行き着く先のない投資先を探して、キリのない「豊かさ」を求めて彷徨っている。仮に石油の輸入が止まれば、私たちの暮らしは本当に立ち行かなくなるだろうか。今の暮らしの水準は維持できないだろうが、暮らしが立ち行かず、食うに困ってしまうだろうか。
まず困るのはガソリンだろう。これは、社会に欠かせない車両のみに限定される。通勤、行楽で車を使うことがなくなる。世の中から渋滞がなくなるし、車が走らなくなれば排気ガスの排出量も大幅に減り、地球環境には良くなる。コロナ禍で似たような現象が世界規模で起こったが、オゾン層の回復がみられたそうだ。近年は猛暑で暑い夏が長く続くが、そういう異常気象も多少はマシになるだろう。
石油由来製品というのも世の中にはたくさんあって、衣服なんかもそうだが、今の日本で明日着るものもない、なんて人はどれだけいるだろう。むしろ、私たちは衣服を持ちすぎているし、逆にリサイクルだ、善意だと言って不要な衣類を大量に貧しい諸外国に押し付けている。
細かいところで言えば、納豆の入れ物や、食品ト

レーなんかも対象になるだろうが、昔は豆腐屋に鍋をもって買い物に行っていたわけだから、同じことをやればいい。
またコロナ禍のような閉塞感の強い社会に戻るのか、という疑念もあるだろうが、逆に私たちはコロナ禍で新たな可能性に多く気付くことができたはずだ。人と人の本来のコミュニケーションの有難さや、工夫次第で暮らしや仕事は何とでもなることを。
人の命よりも、目先のガソリンや経済、それを優先するばかりで独裁的な国家指導者に平気でおべんちゃらを使う政治家を見ていると、人の暮らしの豊かさとは何か、ということについて改めて考えざるを得ない。

【言葉】
世の中の言葉に対する信頼性が低下している。
今の世界情勢をみれば、国家の決定権を持つトップたちが、脅し、まやかし、煽てて、言葉の信頼性を失墜させてゆく。身近なところでは、SNS だろうか。顔の見えない名無しの権兵衛たちが、都合勝手な無責任な言葉で大衆を扇動しようとするが、その動機は単なる目先の小遣い稼ぎに過ぎない。
最近は言葉だけではなく、姿形や風景までもが世の中を簡単に欺く。生成 AI の画像生成技術で私たちはその手段を簡単に手にすることができた。しかし、考えてみれば、こういう言葉や印象操作は現代に限ったことではない。おそらく、人間が言葉を手にした頃から、それは信頼と欺きのツールとして交渉やコミュニケーションとして活用されてきた。何キロも離れた場所に餌場があるのか、そこに危険があるのか、言葉を手に入れた人間は、皆がそれを目にしなくても、会話という手段で共有することができるようになったのだ。それが真実か嘘かであるにしても。
私はケアマネジャーだから、日々、会話にしても、文章にしても、言葉を生業としている。前述の生成 AI の躍進に伴い、ケアプランは３分で自動生成できるまでに至った。それが良いか悪いかは、我々専門職が決めるものではないと思っている。そもそもケアプランはクライエントのものである限り、そこに同意をすれば良いも悪いも存在しない。
一方、専門職の業務の生産性向上という視点でみれば、実に効果的である。私はアセスメントからケアプラン作成までの一連の作業に約１時間かかる。しかし、生成 AI を使えば、３０分は短縮できるだろう。
経験年数が乏しいケアマネジャーであれば、ケアプラン作成まで半日～１日かかる、という人もいる。先ほども言ったが、丁寧とか、専門性とか、それは専門職側の理屈であって、それがクライエントの行動変容やサービス利用にどこまで影響するかは甚だ根拠に乏しいし、それを検証することはないだろう。検証などしてしまえば、専門職など要らない、という不都合な事実が浮き彫りとなるかもしれない。
しかしだ。私は生成 AI が紡ぐ言葉に満足はしない。例えば、先の例のケアプラン。プロンプト次第では、アセスメント（課題分析）無しにケアプラン生成も可能だが、言葉に中身がない。そうなのだ。アセスメントは、そのクライエントに対する固有性の視点であり、それが欠落すると、そこに物語が存在しない。物語のない人生が存在しないのと同じで、物語のないケアプランに共感も信頼もない。
言葉を生業にする私たちが、その言葉に対する関心や信頼を疎かにしていくのか。おそらく、そうなるだろうと私はみている。

2026.5.19 米津達也